令和６年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組

「品川区学力定着度調査」の趣旨

(1)学習指導要領に示された教科の目標や内容の実現状況を把握し、教育課程や指導方法等に関わる区の課題を明確にすることで、その充実・改善を図るとともに、区の教育施策に生かす。

(2)各学校は、教育課程や指導方法に関わる自校の課題・解決策を明確にするとともに、調査結果を経年で把握することで、児童・生徒一人一人の学力の向上を図る。

(3)区民に対し、区立学校における児童・生徒の学力等の状況について、広く理解を求める。

1　調 査 日　令和６年４月１６日（火）

2　調査対象　品川区立学校　第２～９学年の全児童・生徒

3　調査内容

教科に関する調査

→　調査の趣旨に基づき、学習指導要領に定める内容について、基礎・基本および活用の力を測る問題で構成

<第２・３学年>　国語、算数
<第４～５学年>　国語、社会、算数、理科
<第　６　学年>　国語、社会、算数、理科、英語
<第７～９学年>　国語、社会、数学、理科、英語

学校名

令和６年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【国語】

1　定着状況についての概要

分　類	2　年			3　年			4　年			5　年			6　年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基　礎	81.0	86.4	82.9	78.4	77.4	80.3	76.2	81.4	78.4	66.4	68.6	64.7	74.4	78.5	75.9
活　用	54.4	59.6	51.2	56.3	57.8	57.9	60.6	72.1	62.8	60.0	71.2	64.	49.4	55.8	47.7

2　具体的な課題とその要因

2年

基礎、活用ともに目標値を上回っているが、問題の内容別正答率を見ると、「見たことをもとにはっぴょうする」が目標値を下回っている。情報と情報との関係について理解し、相手に伝わるように、経験したことに基づいて話す力が身に付いていないと考えられる。

3年

目標値に対して、正答率が 10 ポイント以上低かったのは、漢字の書き取り、文章を書く問題、説明文の読み取りとなっている。既習の漢字の定着が浅いこと、自分の思いや考えが明確になるように文章を書く経験が少ないこと、事柄の順序を考えながら内容の大体を捉える手段がわからないことが要因として挙げられる。

4年

全ての問題で目標値を正答率が上回る結果となった。特に漢字を読む問題の正答率が 91.4 と高くなっている。一方で、調べたことをもとに文章を書く問題での正答率が 57.4 と一番低い結果となった。２つの資料を比較したり関連付けたりして、共通点や相違点などを考えるのが難しかったことが要因として挙げられる。

5年

基礎と活用の目標値は上回っているが、問題の内容別に見ると、「漢字を書く」が目標値を下回っていた。日頃からの使用の上で間違いが多くみられるが、直しがあいまいな部分があったことが要因と考えられる。

6年

言葉の学習の問題、問題の内容を読み取る問題で、正答率が目標値を下回った。特に、文脈に沿った漢字を適切に使う問題では、目標値 40.0 に対して、正答率が 21.5 と差が大きく開いている。類型外誤答の割合が 60.0 で、文中の間違っている漢字は選べても、正しい漢字が書けていない解答が多かった。

3　課題解決のための方策（取組指標）

2年

一人一人が自分の考えをもつということを学習の中で数多く取り入れ、グループで意見を出し合いながら話し合ってく活動を増やす。

3年

書き写すだけでなく、成り立ちを理解したり、文の中で使ったりするなどして印象に残るよう日常的に漢字の指導を行う。自分の思いや考えを文で表す活動を意図的に計画する。説明文の学習で事柄の順序を考える活動において、机間指導などをして、苦手な児童に対する支援を行う。

4年

授業の中で資料を比較させて、自分の考えを書かせたり、まとめさせたりする活動を取り入れ、文章構成能力を身に付けさせる。

5年

漢字小テストを１週間に１度実施し、定着を図る。学年で取り組んでいる生活ノートの日記でも、習った漢字を必ず使うよう指導し、文章を書く活動を中心に、日頃から漢字を正しく使う力を育てる。

6年

漢字を学習する際に、熟語や文を作るだけでなく、同音異義語なども一緒に調べる活動を取り入れる。また、なぜその漢字が使われるのか、漢字の意味をもとに考えられるよう促す。

４　次年度の数値目標（成果指標）

2年

見たことを発表する問題を中心に目標値を上回るように指導していく。

3年

文章を書く問題を中心に目標値を上回るように指導していく。

4年

文章を書く問題を中心に目標値を上回るように指導していく。

5年

全ての問題で校内正答率が目標値および全国平均正答率を上回るように指導していく。

6年

全ての問題で校内正答率が目標値を上回るように、また文章を書く問題では全国平均を上回るように指導していく。

令和６年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【社会】

１　定着状況についての概要

分　類	４　年			５　年			６　年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基　礎	70.0	74.5	69.2	66.8	66.5	63.0	67.5	72.7	65.4
活　用	60.0	66.0	60.0	55.0	60.8	53.5	56.9	56.6	56.4

２　具体的な課題とその要因

４年

領域別の正答率を見ると、どの分野においても、目標値、全国平均を上回った。問題の内容別に見るとくらしの移り変わりの正答率が目標値に届かなかった。３学期の学習であったため、復習する機会が少なく、定着しなかったと考えられる。

５年

領域別の正答率を見ると、どの分野も平均的に得点している。「都道府県の様子」「くらしを支える水」「ごみのしょりと利用」「自然災害からくらしを守る―地震」の設問で５ポイント以上目標値より下回っている。「特色ある地域の様子」の設問は、どれも正答率は目標値を上回っていた。

６年

領域別の正答率を見ると、活用の分野では、全国平均を上回ったが、目標値より 0.3 ポイント下回った。グラフの読み取りの経験が不足していることが要因として考えられる。昨年度、目標値より下回った「自然環境の学習」については、地図アプリや分布図を使った地域の学習を行ったことで上回ることができた。

３　課題解決のための方策（取組指標）

４年

反復して学習をするため、「一つの単元が終わったから次の単元へ」といった考えではなく、振り返りの機会をしっかりとり定着を図る。

５年

「知識・技能」のより深い理解が課題となる。都道府県をはじめとした基礎的な知識などを反復して理解させ、定着させることが課題である。また、小テストなどを活用し、繰り返し学習を行う。調べ学習などを通して、興味・関心や、学習意欲を高めながら、活用問題にも取り組ませ、学力の定着を図る。

６年

活用できる単元において、グラフの読み取りの学習を意図的に行う。また、グラフからどのようなことがいえるのかについて、話し合い活動を行い、社会的事象について考えられるようにする。どのようなことが読み取れるのかについて、教員が解説を行い、グラフの読み取りの技能の定着を図る。

4　次年度の数値目標（成果指標）

4年

全ての領域で、目標値を上回る指導をしていく。

5年

全ての領域で、目標値を上回る指導をしていく。

6年

活用「グラフの読み取り」の領域において、5ポイントを上回るように指導していく。

令和６年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【算数】

１　定着状況についての概要

分類	２年			３年			４年			５年			６年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基礎	80.3	82.0	81.2	79.4	81.2	81.7	74.1	81.6	75.2	69.2	75.4	70.4	67.0	72.2	68.2
活用	57.1	64.0	55.4	63.6	63.0	64.7	62.2	74.8	64.3	45.6	56.6	44.9	50.5	53.8	46.9

２　具体的な課題とその要因

２年

基礎、活用ともに目標値を上回っているが、問題内容別正答率を見ると、「えをつかったグラフ」だけが目標値を下回っている。「３つのかずのけいさん」の中でも、目標値を下回った問題がある。データを活用した問題を解く経験が少ないことや、３口の計算になると、加法や減法を問題文から読み取れなくなり、立式できない児童がいると考えられる。

３年

長さ・かさ、時こくと時間、表やグラフの問題の正答率が、目標値を下回った。測定、データの活用の領域に課題が見られる。測定については、日常の中で触れる機会が少なく、量的感覚が育まれていないことが要因として考えられる。データの活用については、無回答の児童が約２割いる。

４年

全ての問題で目標値を正答率が上回る結果となった。特に時刻と時間の問題の正答率が 88.9 と高くなっている。一方で、かけ算の問題の正答率が、67.3 と一番低い結果となった。要因として、かけ算の筆算に出てくる数の意味を理解していないからだと考えられる。

５年

大きな数の概数、およその面積の 2 問が目標値を下回る結果となった。このことから数値を簡略化して、およその大きさを求めることに課題があると考えられる。要因として、四捨五入の技能が身に付いていない、どんな数字に変えればいいか見立てを立てることができていないからだと考えられる。

６年

円グラフ、帯グラフを扱った 2 問が目標値を下回る結果となった。このことから示されたデータを活用する力に課題があると考えられる。要因として、与えられたデータから事象の背景や原因を考察することができていないからだと考えられる。

３　課題解決のための方策（取組指標）

２年

グラフを作成する問題を数多く取り組み、経験を増やす。解くために必要な情報を問題文から確実に読み取り、図や絵で表してから立式することを何度も経験させる。さらに自分はどのように考えて立式したのかを言葉で表現させるようにする。

3年

測定については、予想をもとに1km歩いてみたり、具体物を持って重さを比べたりするなど、量的感覚を育むことができるような活動を、意図的に計画する。データの活用については、eライブラリを活用して、定期的に補充の学習を行うようにする。

4年

筆算の数字の意味を考えさせ、一人一人に説明させる等、意味理解を重視した指導を行う。

5年

答えを出す前にどのくらいの大きさになるのかについて、予想を立てる時間を設定する。また、①買い物の場面で概数を使って金額を予想する、②自分の部屋に合う家具を選択するなどの活動を通して、生活場面で概数を生かす力を伸ばす。

6年

データを分析する際、どのグラフ、代表値を使えばよいのかについて、子どもが自分の考えをまとめ、他者と共有する時間を設定する。また、①運動会でリレーの走順を決める際、平均値や中央値をもとに決める、②複数の小テストの結果を分析し、定期考査の勉強法について考えるなど、児童が実際にデータを活用する機会を設定する。

4　次年度の数値目標（成果指標）

2年

数と計算、データの活用の領域で目標値を上回るようにする。

3年

測定、データの活用の領域で目標値を上回るようにする。

4年

全ての問題で目標値を上回るようにする。

5年

概数、およその面積で目標値を上回るようにする。

6年

データの活用の領域で目標値を上回るようにする。

令和６年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【理科】

1　定着状況についての概要

分　類	4　年			5　年			6　年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基　礎	65.5	68.4	61.3	68.8	67.8	68.4	64.3	69.5	63.4
活　用	45.6	41.8	40.7	46.1	42.9	42.9	55.0	61.1	54.1

2　具体的な課題とその要因

4年

活用の目標値に対して、正答率が41.8と下回った。結果からどのようなことがいえるのかを自分の言葉で表現する力がついていないことが要因と考えられる。

5年

基礎も活用も正答率が目標値を下回った。基礎では、言葉の意味や性質などを理解できていないことが要因と考えられる。活用では、なぜその実験方法を行うのか、実験の結果から考えられることをまとめる力がついていないことが要因と考えられる。

6年

基礎、活用ともに目標値を上回った。しかし、問題の内容別で見ると「電流のはたらき」が目標値を下回っており、基礎となる知識の理解が不十分であることが要因であると考えられる。

3　課題解決のための方策（取組指標）

4年

授業で観察、実験を多く取り入れ、自然や科学現象と触れる機会を増やすとともに、課題解決の力をつけるために、結果から考察することを繰り返し行っていく。

5年

授業で実験を行う際に、使う器具や方法について、複数回確認するとともに、実験の計画や考察を自分の言葉でまとめる活動を増やしていく。また、考えを共有する活動を取り入れ、相手に理解してもらえる説明を意識させる。

6年

授業の中で、基礎となる知識の確認を繰り返し行うことで、知識のさらなる定着を目指す。また、結果からわかることを自分の言葉で説明する練習を繰り返すことで、実験や観察に対する理解を深める活動も行っていく。

4　次年度の数値目標（成果指標）

4年

「基礎」「活用」共に目標値を超えられるように、基礎学力の定着と既習事項を活用する力を伸ばす。

5年

「基礎」「活用」共に目標値を超えられるように、基礎学力の定着と既習事項を活用する力を伸ばす。

6年

「基礎」「活用」ともに目標値を５％以上上回るように、基礎知識定着の徹底と思考力の育成を行う。

令和６年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組

教科名【英語】

１　定着状況についての概要

分　類	６　年		
	目標値	校内	全国
基　礎	73.4	80.1	77.5
活　用	71.3	70.8	72.9

２　具体的な課題とその要因

６年

領域別の正答率を見ると、活用の分野では、全国平均、目標値を下回った。基礎分野「アルファベットや単語の書き」の領域では、平均を大きく上回っているが、基礎分野「アルファベットや文章の聞き取り」において、平均を下回った。単語の聞き取り等の分野を苦手としている児童が多いことが要因として挙げられる。また、活用分野「英作文や会話の応対」においても平均を下回っていた。

３　課題解決のための方策（取組指標）

６年

日常の学習において、アルファベットや単語の聞き取りの活動を行う。単元末の表現の活動において、例文をもとにした応対の活動を意図的に行う。全体の学習のみではなく、練習動画等を活用し、児童が個別に練習できる環境づくりを行う。

４　次年度の数値目標（成果指標）

６年

アルファベットの聞き取りにおいて、目標値を５ポイント上回るようにする。

英作文や会話の応対に関する領域において、目標値を５ポイント上回るようにする。

令和６年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組

教科名【国語】

1　定着状況についての概要

分　類	7　年			8　年			9　年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基　礎	63.5	69.6	64.9	67.9	74.3	70.3	67.9	77.4	69.8
活　用	52.2	60.5	54.6	55.0	62.0	55.2	60.0	68.6	64.3

2　具体的な課題とその要因

7年　目標値に対して校内平均正答率が下回っているのは「漢字の書き取り」であり、10 ポイントほど低い。「漢字の読み取り」についても目標値が上回っているものの、十分な定着とは言い難く、小学校の既習漢字の定着に課題があると考えられる。作文・意見文等の文章を書く際にも、既習漢字を用いずに安易にひらがなを使用する傾向にあり、自ら進んで漢字を活用しようとする意識が低いことも漢字が定着しない要因の一つと考えられる。

8年　目標値に対して校内平均正答率が下回っている問題はない。しかし、「漢字の書き取り」問題に関しては目標値と同じ数値となっており、全国平均と比べると 2.9 ポイント下回っているため、定着に課題があると考えられる。漢字の書き取りについては、小テストやことのはノートによる学習を通して定着を図っているが、タブレットを使用した学習が増えたことにより、板書をノートにとったり、文章を書いたりするなど、手で直接漢字を書く機会が減っていることが要因の一つであると考えられる。

9年　目標値に対して校内平均正答率が下回っている問題はないが、「漢字の書き取り」「自分の考えを文章に書く」の２つの問題については、目標値にほぼ近い数値となっており、定着に課題があると考えられる。漢字の書き取りについては、小テストやことのはノートによる学習を通して定着を図っているが、正しく漢字が書ける子とそうでない子の間の差が大きいと考えられる。「自分の考えを文章に書く」ことについては、無回答は少なく誤答が多いことから、問われていることに対しての理解や確認ができていない中で、漫然と書いていることが考えられる。

3　課題解決のための方策（取組指標）

7年　新出漢字だけではなく、既習漢字の定着を図る必要がある。漢字の小テスト等は月に１回から２回に増やしていく。文章を書く際にも、既習漢字を使用するよう促し、定着を図っていく。

8年　「漢字を書くこと」については、漢字の小テストを月に１回から月に２回に増やすだけでなく、ノートをとらせたり、文章を書かせたりなど漢字を書く機会をできるだけ確保し定着を図っていく。

9年　「漢字を書くこと」については、漢字の小テストを今年度より毎月１回行い、定着を図っていく。「自分の考えを文章に書く」については、社説や新聞記事などを読ませ、それに対して自分の意見を書かせる活動を取り入れる。

4　次年度の数値目標（成果指標）

7年　「漢字を書くこと」について、目標値に対して５ポイント以上上回るようにする。そのために前期課程のうちから漢字検定などに取り組む機会を生かして漢字の学習に興味をもたせていく。

8年　「漢字を書くこと」について、全国の平均が目標値よりも３ポイント以上上回っているため、次年度は目標値に対して３ポイント以上上回るようにする。

9年　「漢字を書くこと」について、目標値に対して５ポイント以上上回るようにする。また「自分の考えを文章に書く」ことについても、目標値に対して５ポイント以上上回るようにする。

令和６年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【社会】

1　定着状況についての概要

分　類	7　年			8　年			9　年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基　礎	57.4	54.5	56.8	55.5	55.9	55.1	56.9	60.5	57.2
活　用	40.0	41.1	39.4	40.5	42.2	39.7	45.0	51.5	43.1

2　具体的な課題とその要因

7年　歴史的分野の正答率が目標値に対して、全般的に約 2.0 ポイント程度下回っている。観点別正答率に着目すると、思考・判断・表現の正答率が目標値に対して約５ポイント下回っている。歴史的分野の基礎的・基本的な知識の定着が不十分であることが要因と考えられる。

8年　「日本の姿」「世界の諸地域」の正答率が目標値に対して、約 2.0 ポイントしか上回ることができていない。また観点別正答率に着目すると、知識・技能の観点が目標値より 1.7 ポイント下回っている。世界的に見た際の日本の位置や世界の諸地域の基礎的な内容の定着を図れていないことが要因である。

9年　内容別正答率に着目すると、「日本の諸地域」が目標値より 1.5 ポイント上回っており、「明治時代」の正答率が目標率から 2.3 ポイント、全国平均から 0.9 ポイント下回っている。前者については、各地域に関する知識の定着が図れていないことが考えられる。後者については本調査までに明治初頭の内容の定着が不十分であったことが要因である。

3　課題解決のための方策（取組指標）

7年　授業内で、基礎的・基本的な知識の習得を目的とした活動（小テストや振り返り課題）を行い、知識の定着を図る。複数の歴史的事象を関連付け記述させる機会を増やすことで、思考力、判断力、表現の向上を図る。

8年　授業内で生徒自身が主体的に情報を集め、活用する活動を増やすことによって、基礎的・基本的な学力の定着を図る。ワークを活用し、得た知識をアウトプットする練習をしていく。

9年　引き続き基礎的・基本的な学力の定着を図る。具体的方策として、週一回程度小テストを設け、学力の定着を可視化する。また毎時の活動の中で、振り返りを行える時間を設定する。

4　次年度の数値目標（成果指標）

7年　３観点すべてにおいて、目標値から２ポイント以上上回ることを目標とする。

8年　３観点すべてにおいて、前年度に比べ正答率を３ポイントあげる。

9年　３観点すべてにおいて、目標値から５ポイント以上上回ることとする。

令和６年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組

教科名【数学】

1　定着状況についての概要

分　類	7　年			8　年			9　年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基　礎	65.5	71.0	67.5	60.0	67.3	58.2	59.6	66.3	53.6
活　用	53.6	57.3	52.1	46.9	47.0	43.9	46.3	53.8	42.8

2　具体的な課題とその要因

7年　問題の内容別正答率では「小数同士の割り算」が目標値を 10 ポイント、「通分を含む計算」が 9 ポイント下回っている。小数点の処理や通分の技能の習得率が低いとみられる。また、「中央値の読み取り」では目標値より 17 ポイント低くなっており、中央値の意味の理解が低いとみられる。

8年　「思考・判断・表現」における観点別正答率が目標値より 3.6 ポイント下回る結果となった。自主的に学習を進める際に「活用」の力を育もうとする態度が低いとみられる。

9年　問題の内容別正答率では「証明」が目標値を 2.2 ポイント上回っているが、他の単元と比較すると、定着が不十分である。

3　課題解決のための方策（取組指標）

7年 (1)小数の乗法・除法を通して、小数点を処理する技能を習得させる。
(2)分数の加法・減法を通して、通分の技能を習得させる。
(3)様々なデータや度数分布表、ヒストグラムを読み取る活動を通じて、中央値の意味の理解を深める。

8年 (1) 理由や根拠及び自らの操作を言語化する場面を多く設け、論理的思考力を高める。
(2) 作問活動を通して、類題から共通点を見出すことで理解を深める。
(3) 「思考・判断・表現」の小テストを実施する。

9年 (1)証明の仮定と結論について確認する。また、証明の根拠を理解させる。
(2)証明をする際には、試行錯誤をしながら、証明の方針を立てさせる。
(3)証明の小テストを実施する。

4　次年度の数値目標（成果指標）

7年　「基礎」は目標値を 5 ポイント以上越えているが、「活用」は 3.7 ポイントにとどまっている。習熟度に合わせて目標を設定し、数学を活用する力を育成し、来年度は両方とも 5 ポイント以上上回れるようにする。

8年　「思考・判断・表現」における観点別正答率で、目標値を 1.0 ポイント上回る。

9年　昨年度の目標である「基礎」「活用」共に目標値を 5 ポイント以上、上回った。次年度も、5 ポイント以上、上回れるように、習熟度に合わせた指導をしていく。

令和６年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【理科】

１　定着状況についての概要

分　類	７　年			８　年			９　年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基　礎	69.0	75.3	70.4	65.7	71.3	63.9	58.2	59.3	53.4
活　用	50.0	51.4	46.7	45.5	45.7	39.6	47.3	51.6	44.7

２　具体的な課題とその要因

７年　観点別正答率については「知識・技能」の目標値 63.7 に対し正答率 68.6、「思考・判断・表現」の目標値 60.8 に対し正答率 64.9、「主体的に学習に取り組む態度」の目標値 50.7 に対し正答率 52.2 であった。観点別正答率の項目の「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」はどれも目標値を上回っているが、「主体的に学習に取り組む態度」は 1.5 上回っているだけである。身の回りの事物・現象について、疑問をもち、自分自身で解決する習慣を身に付けさせることが課題である。

８年　観点別正答率については「知識・技能」の目標値 68.7 に対し正答率 73.6、「思考・判断・表現」の目標値 47.0 に対し正答率 49.5、「主体的に学習に取り組む態度」の目標値 53.6 に対し正答率 56.9 であった。観点別正答率の項目の「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」はどれも目標値を上回っているが、領域別正答率をみると「水溶液の性質」領域が目標値を下回っている。観察、実験を通して、必要な知識・技能を身に付けることが課題である。

９年　観点別正答率については「知識・技能」の目標値 58.9 に対し正答率 60.4、「思考・判断・表現」の目標値 48.6 に対し正答率 51.8、「主体的に学習に取り組む態度」の目標値 47.0 に対し正答率 50.3 であった。どれも目標値を上回っているが、「知識・技能」のより深い理解が課題となる。基礎的な知識と実験の操作方法などを反復して理解させ、定着させることが課題である。

３　課題解決のための方策（取組指標）

７年　授業で観察、実験（演示実験も含）を多く取り入れ、自然や科学現象と触れる機会を増やすとともに、結果から考察することを繰り返し行うことで、思考力の向上を図る。また、身近な事象と結び付けて、調べ学習などを通して、興味・関心を高め、学習意欲を高める。

８年　授業の中で関連する既習の内容も復習しながら、苦手意識の強い化学分野については小テストなどを活用し、繰り返し学習を行い、学習の定着を図る。また、身近な事象と結び付けて、調べ学習などを通して、興味・関心を高め、学習意欲を高める。

９年　特に苦手意識の強い「生命」の領域について７年生の内容から定期的に復習を行い、小テストなどを活用し、繰り返し学習を行う。目標値は上回っているので、身近な事象と結び付けて、調べ学習などを通して、興味・関心や学習意欲を高めながら、活用問題にも取り組ませる。

４　次年度の数値目標（成果指標）

７年　「基礎」は目標値以上、「活用」は目標値の 3%以上を目標とする。

８年　「基礎」「活用」共に目標値の 5%以上を目指して、基礎学力の定着と既習事項を活用する力を伸ばしていく。

９年　「基礎」は 3%以上、「活用」5%以上目標値を上回ることを目指して、基礎学力の定着と既習事項を活用する力を伸ばしていく。

令和６年度「品川区学力定着度調査」の結果から明らかになった課題と学力向上に向けた取組
教科名【英語】

1　定着状況についての概要

分　類	7　年			8　年			9　年		
	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国	目標値	校内	全国
基　礎	71.3	81.3	76.3	54.1	64.0	56.0	57.3	62.7	54.8
活　用	75.0	80.9	79.2	46.8	56.3	45.9	39.0	46.1	34.8

2　具体的な課題とその要因

7年　「聞くこと、読むこと、書くこと」のいずれも目標値を超えているが、「書くこと」の中でも「英作文」は目標値を2.6しか上回っていない。小学校で、英語を文字にしてアウトプットする機会が少なかったと考える。

8年　「聞くこと、読むこと、書くこと」のいずれも目標値を超えているが、「書くこと」に関しては46.6%であり５割を超えていない。その中でも「3文以上の英作文」が47.2%となっている。その要因は短文を書かせる指導の機会を少なく設定したからだと考える。

9年　長文の読み取りにおいて、目標値を0.7しか上回っていない。また、場面に応じて書く英作文においても、目標値を2.0しか上回っていない。8年生の段階では、文法などの基礎的なことを主に取り扱っていたためであると考えられる。

3　課題解決のための方策（取組指標）

7年　書く力を向上させるために、ワークシートを活用して、並べ替え問題や和文英訳の問題から英文を作成する練習をさせる。英文の作成に慣れてきたら、各単元の終わりに、教材に関連する題材から自分の考えや意見を3文で表現させる指導を行う。

8年　文法理解と文法演習のみで終わらせず、既習文法を取り入れた3文以上の英文を書かせる機会を増やしていく。意味の繋がりを意識した簡単な日本語で内容を考えさせ、それを英語にしていく。その際に、既習文法も取り入れ、文法の更なる定着も目標とする。

9年　長文の読み取りに関しては、毎日の帯活動においてリーディング活動を取り入れ、長文の解き方を指導する。その際には様々な形の英文を取り入れる。英作文においては、日々の文法指導に加え、文章を書く機会を週に１回程度設ける。その際、英作文の書き方の指導も実施する。

4　次年度の数値目標（成果指標）

7年　「聞くこと」の校内正答率が85%を上回る。基礎学力を更に定着するよう生徒全体の学力の底上げを図る。

8年　「聞くこと」の領域は比較的高いがさらに伸ばし75%以上にする。「書くこと」の領域を50%以上にする。また、校内平均正答率が昨年度からの目標であった60%を超えたので今後は65%を目指していく。

9年　場面に応じて書く英作文においては正答率40%、その他全ての分野において正答率50%以上にする。